

## 2026年3月期第2四半期決算電話会議説明および議事録

参考資料:2026年3月期第2四半期(中間期)決算説明資料

[mitsui-](https://mitsui-kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=3jT8s7Vz%2bA8%3d&tabid=100&mid=1060&TabModule819=0)

[kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=3jT8s7Vz%2bA8%3d&tabid=100&mid=1060&TabModule819=0](https://mitsui-kinzoku.com/LinkClick.aspx?fileticket=3jT8s7Vz%2bA8%3d&tabid=100&mid=1060&TabModule819=0)

(補足) PKG : パッケージ基板

HDI : マザーボード(High Density Interconnect)

### ■ご説明



## 2025年度第2四半期(中間期)決算

- ・2025年度上期の前年同期比では、MicroThin™やAIサーバー向けの電解銅箔VSP™など機能材料セグメントの主要製品の販売量が増加したものの、金属セグメントでの在庫要因の悪化等もあり、売上高、営業利益、経常利益は僅かに増収増益となった。なお、当期純利益は三井金属アクトの株式譲渡に伴う特別損失計上などにより悪化した。
- ・通期予想の前回予想比では、機能材料セグメントでMicroThin™やVSP™などの主要製品の需要が堅調であることや、金属セグメントで金属価格の上昇と為替が円安で推移することによる収益改善およびそれらに伴う在庫要因の好転等により増収増益を見込む。

(単位: 億円)	上期実績			通期予想		
	2025 実績	2024 実績	増減 (25-24)	2025 今回予想	2025 前回予想	増減 (今回-前回)
売上高	3,643	3,481	162 4.6%	7,150	6,650	500 7.5%
営業利益	398	388	9 2.4%	780	460	320 69.6%
経常利益	391	384	8 2.0%	770	440	330 75.0%
親会社株主に帰属する 当期純利益	190	370	-180 -48.6%	430	170	260 152.9%

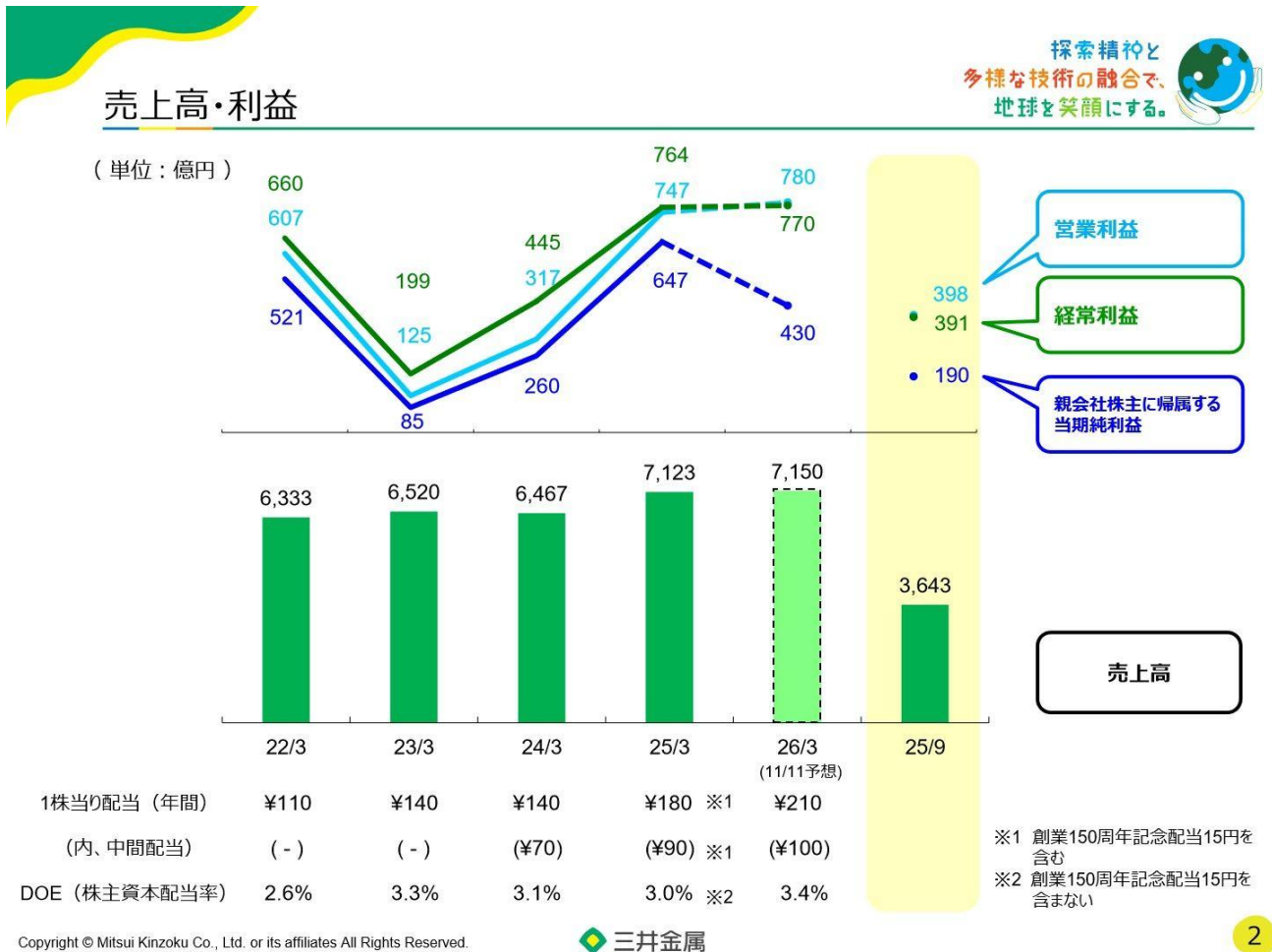
決算説明資料 1 ページをご覧ください。

・2026年3月期第2四半期の売上高は、3,643億円、営業利益は398億円、経常利益は391億円、親会社株主に帰属する当期純利益は190億円となりました。前年同期比では、MicroThin™やAIサーバー向け電解銅箔VSP™など、機能材料セグメントの主要製品の販売量が増加したことなどにより、当社グループ全体の売上高は162億円増加いたしました。

・利益につきましては、機能材料セグメントの主要製品の販売量増加に加え、銅箔製品の値上げ効果はあるものの、金属の在庫要因の好転が前年同期ほど大きくなかったことなどにより、営業利益は前年同期に比べ9億円の増加、経常利益も8億円の増加にとどまり、親会社株主に帰属する当期純利益は、三井金属アクトの株式譲渡に伴う特別損失を188億円計上したことなどにより、前年同期に比べ180億円の減少となりました。

・2026年3月期の通期予想につきましては、上期の実績を反映し、下期の事業動向などを踏まえて見直しました結果、売上高7,150億円、営業利益780億円、経常利益770億円、当期純利益430億円と、前回8月8日に開示しました通期予想を上回り、なかでも営業利益、経常利益につきましては、2025年3月期に続き過去最高となる見込みです。

・下期の金属価格の前提につきましては、LME 亜鉛価格 3,000ドル/トン、LME 鉛価格 2,000ドル/トン、LME 銅価格 454セント/ポンド、為替は 150円としております。



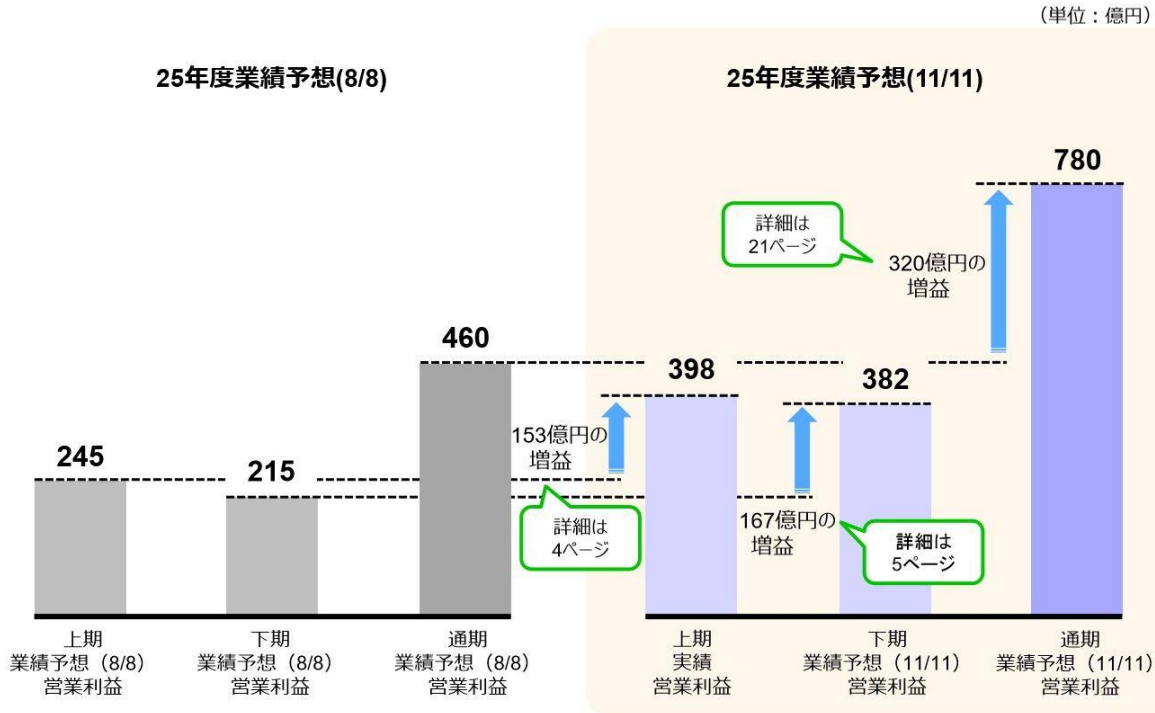
資料 2 ページをご覧ください。

・売上と利益の推移を示したグラフを載せております。グラフの下のほうに記載しております、配当につきまして、11月11日に開示しました「2026年3月期通期業績予想および配当予想の修正に関するお知らせ」通り、期末配当予想を95円から110円に増額し、中間配当100円と合わせて、年間配当予想は210円としております。



## 25年度営業利益見込

25年度営業利益は780億円と前回業績予想比で320億円の増益を見込む

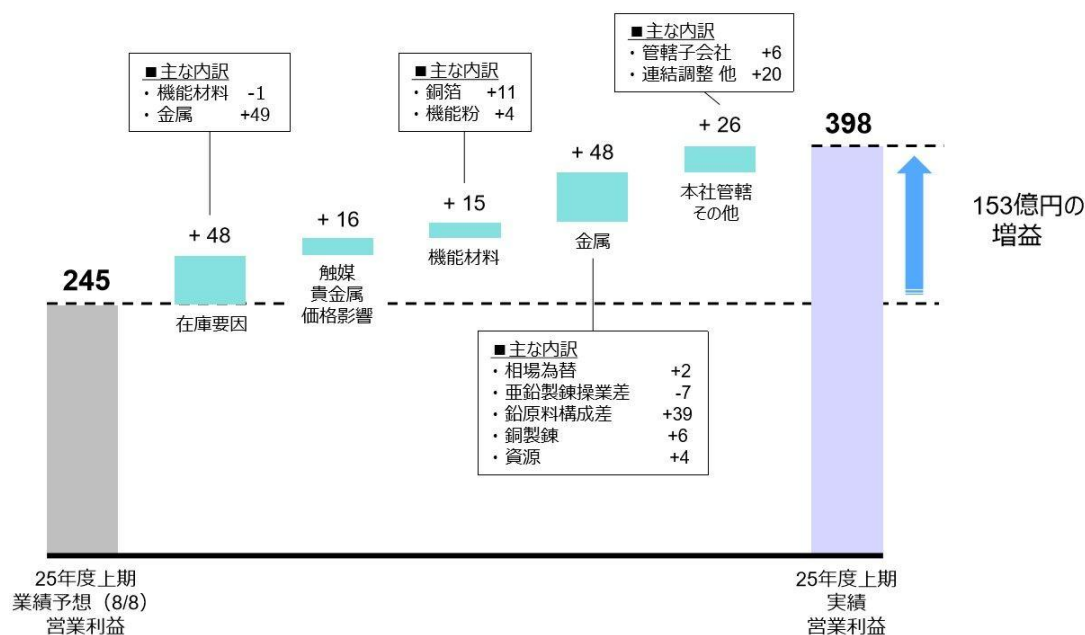


資料 3 ページをご覧ください。

・2026年3月期の営業利益につきまして、上期は前回業績予想比で153億円増益の398億円、下期は167億円増益の382億円、通期では320億円増益の780億円を見込んでおります。

## 25年度上期営業利益（対前回業績予想）

(単位：億円)



上期営業利益の前回業績予想との差異につきまして、ご説明いたします。資料4ページをご覧ください。

・営業利益では、グラフの右の青い矢印のとおり、153億円の増益を見込んでおります。金属価格の上昇や為替が円安で推移したことにより、在庫要因および触媒貴金属価格影響が好転しており、かつ、全ての事業セグメントで増益となっております。

・機能材料セグメントでは、MicroThin™の販売量増加やコスト減少などにより、銅箔事業で15億円の増益となっております。

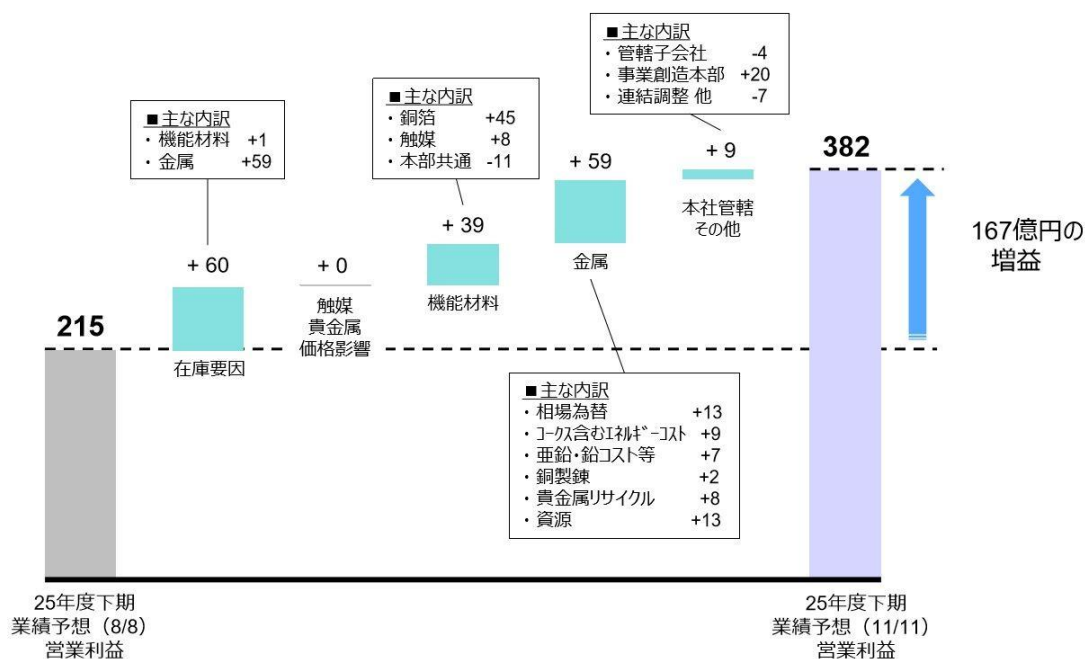
・金属セグメントでは、滞留していた繰り返し原料の供用による鉛原料構成差による好転が大きく、48億円の増益となっております。なお、この繰り返し原料の供用による好転は、上期の一過性によるものであります。

・本社管轄その他では、26億円の増益であり、棚卸資産未実現利益の調整など、主に連結調整によるものです。

・合計して153億円の増益ですが、在庫要因の48億円や貴金属価格影響の16億円、金属の繰り返し原料の約40億円を考慮すると、いわゆる実力ベースでは50億円程度の増益となります。

## 25年度下期営業利益見込（対前回業績予想）

（単位：億円）



下期営業利益の前回業績予想との差異につきまして、ご説明いたします。資料 5 ページをご覧ください。

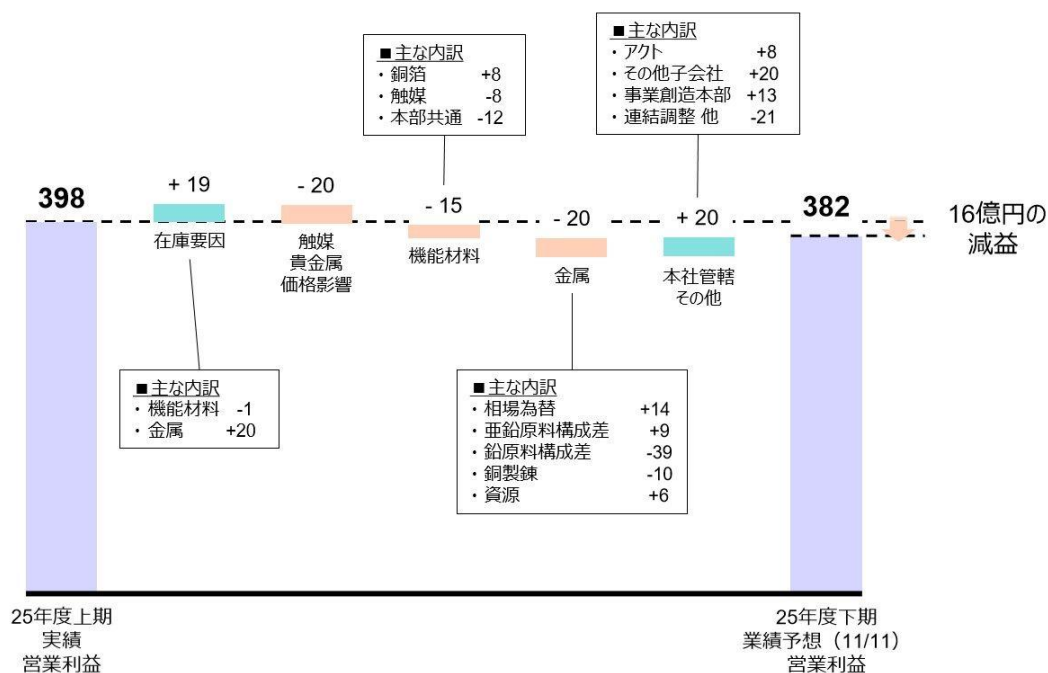
・営業利益では、167 億円の増益を見込んでおります。価格前提として、先ほど申し上げたとおり、亜鉛価格 3,000ドル/トン、為替 150 円と見込んでいる影響で、在庫要因や金属セグメントの業績が好転しております。

・これに加え、機能材料セグメントの銅箔事業で、主に MicroThin™や電解銅箔 VSP™の販売量増加、および値上効果などにより 45 億円の増益となり、機能材料セグメント全体で 39 億円の増益を見込んでおります。



## 25年度下期営業利益見込（対25年度上期営業利益）

（単位：億円）



6 ページをご覧ください。

・上期と下期の差につきましては、下期見込み営業利益は 382 億円と、上期実績営業利益 398 億円と比べて若干の減益を見込んでおります。

・下期は、亜鉛価格 3,000 ドル/トン、為替を 150 円と、上期より当社にとって有利な条件で見込んでおります。また、AI サーバー向け電解銅箔 VSP™の販売量増加などの好転要因はあるものの、上期で好転した貴金属価格影響の剥落、および季節的要因による触媒販売量の減少、金属セグメントで上期に計上した繰り返し原料の供用による一過性の好転が剥落するなどにより、上期に比べて減益となる見込みです。

## 営業外・特別損益

(単位：億円)

	上期			下期			通期		
	2025 実績	2024 実績	増減 (25-24)	2025 今回予想	2024 実績	増減 (25-24)	2025 今回予想	2024 実績	増減 (25-24)
金利収支	-9	-11	2	-9	-8	0	-17	-19	2
受取配当金	5	5	0	0	1	-1	5	6	-1
持分法投資損益	14	28	-14	7	18	-11	21	46	-25
為替差損益	-18	-31	12	0	7	-7	-18	-24	6
その他	2	5	-2	-2	3	-6	0	8	-8
<b>営業外損益 計</b>	<b>-6</b>	<b>-4</b>	<b>-2</b>	<b>-4</b>	<b>21</b>	<b>-25</b>	<b>-10</b>	<b>17</b>	<b>-27</b>
固定資産除売却	-8	-9	1	-22	-20	-1	-29	-29	-1
減損損失	0	-11	11	0	-17	17	0	-28	28
有価証券売却損益	2	94	-92	0	0	0	2	94	-92
関係会社株式売却損益	21	22	-1	-188	0	-188	-167	22	-189
貸倒引当金繰入額	12	0	12	0	-5	5	12	-5	17
その他引当金繰入額	-188	0	-188	188	0	188	0	0	0
その他	-2	-2	0	-2	-7	5	-4	-10	6
<b>特別損益 計</b>	<b>-163</b>	<b>93</b>	<b>-256</b>	<b>-24</b>	<b>-50</b>	<b>26</b>	<b>-186</b>	<b>44</b>	<b>-230</b>

その他の項目についてご説明いたします。資料11ページをご覧ください。

左下に記載の通り、三井金属アクトの株式譲渡に伴う損失188億円を、その他引当金繰入額として上期に計上しておりまして、これを下期に関係会社株式売却損益に振り替えることとしております。  
なお、2025年11月4日に三井金属アクト社の株式譲渡を予定どおり実施いたしました。

## セグメントの業績（1） 機能材料



(単位：億円)

	上2025 実績	上2024 実績	増減 (25-24)	下2025 今回予想	下2024 実績	増減 (25-24)	FY2025 今回予想	FY2024 実績	増減 (25-24)
■売上高	1,505	1,240	265	1,465	1,221	244	2,970	2,462	508
■営業利益	280	221	59	245	197	48	525	418	107
■経常利益	265	197	68	240	207	34	505	403	102
※実力損益	242	165	77	238	195	44	480	359	121

※実力損益：経常利益から在庫要因・触媒貴金属価格影響を除いたもの

(機能材料製品)	(主な用途)
銅箔	・高密度半導体パッケージ材料 ・プリント配線基板
触媒	・二輪車・四輪車排ガス浄化触媒
機能性粉体 (電池材料)	・ハイブリッド車向けニッケル水素電池 ・リチウムイオン電池
機能性粉体 (機能粉)	・各種電子部品
レアマテリアル	・ガラス研磨材 ・各種電子部品
セラミックス	・高温用窯道具、電子部品用窯道具 ・溶融アルミニウム濾過装置
薄膜材料	・フラットパネルディスプレイ
HRDP ※2	・次世代半導体パッケージ用キャリア

### 経常利益の増減説明

[ 上2024→上2025 + 68]

銅箔	+75	(MicroThin™・VSP™増販 他)
触媒	+22	(貴金属価格影響好転 他)
薄膜	-20	(在庫要因悪化 他)

[ FY2024→FY2025 + 102]

銅箔	+148	(MicroThin™・VSP™増販 他)
触媒	+14	(貴金属価格影響好転 他)
機能粉、レアマテリアル合計	-11	(減販 他) ※1
薄膜	-23	(在庫要因悪化 他)
本部	-19	(組織改編影響 他)

※1 2025年4月組織改編で機能粉の一部製品をレアマテリアルに移管したため、経常利益を合計して比較している

※2 2025年10月にHRDP事業を事業創造本部から移管

セグメントごとの状況についてご説明いたします。最初に機能材料セグメントです。資料の14ページをご覧ください。

・特に銅箔事業については、25年度に入りまして、MicroThin™やAIサーバー向けの電解銅箔VSP™が昨年以上に実需が旺盛であり、足元それが継続している状況です。また数量の増加に加えまして、昨年実施しましたMicroThin™や電解銅箔の値上げ効果、さらに足元、VSP™を含む電解銅箔の値上げを申し入れています。これらにより、対前年同期比で銅箔事業は上期、通期ともに販売数量増や値上げによる増益を見込んでおり、経常利益の増減説明のとおり銅箔が非常に好調です。

・右下の2024年から2025年にかけての本部の組織改編影響他という項目がありますが、これは10月1日からHRDP®を事業創造本部から機能材料本部に移管し、それに伴うコスト増を10億円程度織り込んでおります。これからは機能材料事業とのシナジーを活用しながらHRDP®の本格的な事業化に向けて進めてまいります。

・このような状況の下、機能材料セグメントの25年度の経常利益は上期で265億円、通期で505億円を見込んでおりまして、これは当社の25年度からの3年間の中期経営計画「25中計」の最終年度27年度の計画に並ぶ水準となっています。



## セグメントの業績（２） 金属

(単位：億円)

	上2025 実績	上2024 実績	増減 (25-24)	下2025 今回予想	下2024 実績	増減 (25-24)	FY2025 今回予想	FY2024 実績	増減 (25-24)
■売上高	1,612	1,552	60	1,908	1,697	210	3,520	3,250	270
■営業利益	177	227	-49	178	191	-13	355	418	-63
■経常利益	184	243	-59	176	202	-27	360	445	-85
※実力損益	157	166	-9	129	153	-25	286	319	-33

※実力損益：経常利益から在庫要因を除いたもの

### 経常利益増減分析

	上2024→ 上2025	FY2024→ FY2025予想
相場・為替	-12	-10
T/C条件（亜鉛）	-18	-27
棚卸資産在庫要因	-50	-52
持分法損益	-8	-21
エネルギーコスト	22	35
（上記のうち、コアス）	(10)	(10)
その他※	7	-10
合計	-59	-85

### 2025年度年間損益感応度（経常損益）

	フルオープン	予約含む
亜鉛(LME)	± 100\$/t	15.8
鉛(LME)	± 100\$/t	2.1
為替	± 1yen/\$	5.1

### 亜鉛TC条件

FY2024	165 \$/t
FY2025	80 \$/t

### ※その他の主な内訳

上2024→ 上2025	鉛原料構成差 +26、銅製錬委託条件差 -9、資源 -17
FY2024→ FY2025予想	亜鉛製錬操業差 -17、鉛操業差 -9、鉛原料構成差 +16、銅製錬委託条件差 -23、銅製錬コスト(大定修+24含む) +17、貴金属リサイクル +10、資源 -13

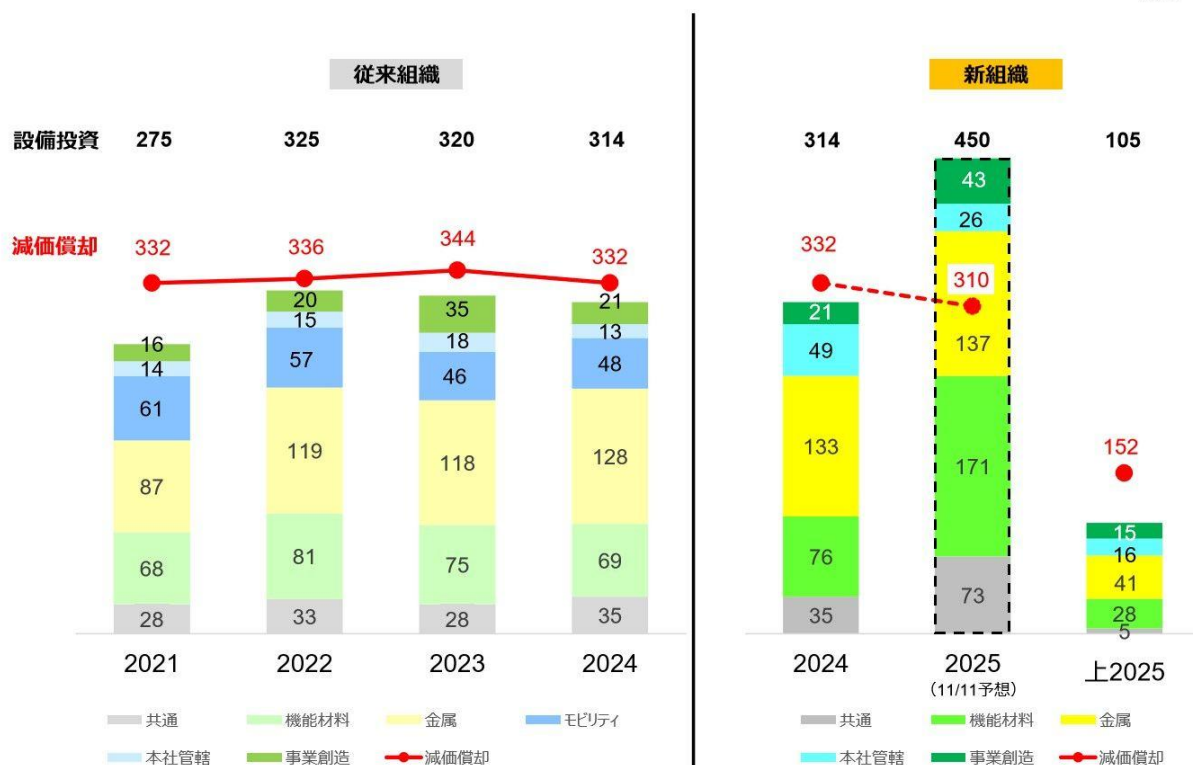
次に、金属セグメントです。資料15ページをご覧ください。

・25年度については、対前年同期比で亜鉛価格は同水準で推移しましたが、為替が若干円高傾向で推移しており、さらにT/Cの悪化や前期に発生しました棚卸資産の在庫要因の好転が剥落といった要因によりまして、上期、通期全て対前年同期比では減益となっております。

・今年度通期の実力損益286億円という数字になっておりますが、一過性の鉛原料構成差の約40億円が含まれておりますので、それを除くと大体246億円となります。金属事業は2030年に実力損益ベースで200億円を目指すことにしており、おおよそ150から200億円の実力損益の事業という認識であることから、この数字は前年同期比では下回りますが、今期の246億円という数字は悪い数字ではないという認識でございます。

# 設備投資・減価償却

(単位：億円)



Copyright © Mitsui Kinzoku Co., Ltd. or its affiliates All Rights Reserved.



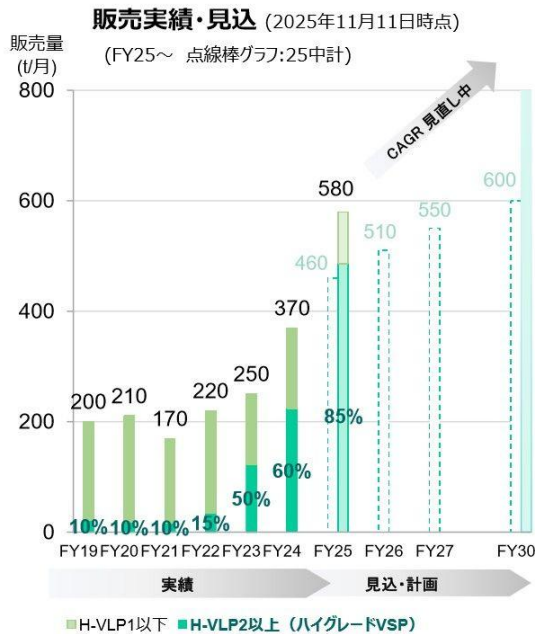
次に、設備投資についてご説明いたします。16ページをご覧ください。

・2025年度は450億円のペースで設備投資と予定しております。ここには記載はしていませんが、期初計画が410億円で、当社にとって高水準の投資計画をもともと予定していたものになります。

・期初計画比で40億円増えておりますが、主な増加要因としましては、三井金属アクトの株式譲渡に伴いまして、触媒事業のタイの工場の移転費用が入っております。こちらは機能材料に入っております、30億円程度です。また、国内の事業所の土地買取り、20億円程度が一番下の灰色の共通部分に入っております。

## 高周波基板用電解銅箔「VSP™」 販売実績・見込

2025年度の販売量は中計最終年度の2027年度計画を上回る数量増が見込まれており、CAGR見直しにあたって今後の需要拡大を見極める



2025年度  
HVLP3以上のカテゴリーを中心に販売拡大し、  
それに伴い生産能力増強実施  
台湾、マレーシア両拠点合計 720トン/月 (期初580トン/月)

増加する需要に確実に対応すべく1,200トン/月体制決定。  
今後は当社が強いHVLP4以上の比率を高めていく

### ■ VSP™生産能力推移 (トン/月)

	2025年11月 現在	2026年3月	2026年9月	2027年9月	2028年9月
台湾	560	600	720	760	860
マレーシア	60	120	120	240	340
計	620	720	840	1,000	1,200

※2025年11月11日付ニュースリリース  
高周波基板用電解銅箔「VSP™」の生産体制増強

最後に、高周波基板用電解銅箔VSP™についてご説明いたします。28ページをご覧ください。

・まず左のグラフのとおり、25年度のVSP™販売見込は580t/月です。隣にあります点線の数字が25中計の数字で、25中計27年度が550tと、すでに中期経営計画を上回る数字が見込まれておりまして、11月11日付けでVSP™の生産能力、生産体制増強につきまして、1,200t体制にする内容のリリースを行っております。

・今後の需要拡大を見極めながら、確実に量産できるようしっかりと対応していくとともに、今後はVSP™の中でもハイグレードの比の比率が高まっていきますので、そのなかでも当社の強みであるHVLP4以上の比率を高めていくことで収益性を確保するように取り組んでまいります。

## ■ 質疑応答

### 【機能材料セグメント】

- Q. (決算説明資料) P.12 の銅箔事業部の電解銅箔、VSP™、MicroThin™の販売数量について、今回予想と前回予想の増減、上期実績と下期見通しの増減、需要動向と、VSP™の上期実績が前回予想に対し未達だった理由をあわせて解説いただきたい。
- A. 上期から下期にかけての販売数量の推移について、VSP™は上期実績が前回予想に未達だったが、市況自体は非常に強く実需が強いなかで一時的な調整として若干減販となった。減販分は下期の販売増を見込み、通期予想は前回予想通りと見ている。VSP™は上期から下期にかけて伸びていくという従来の見方から変わっていない。MicroThin™の HDI 向けについて、前回予想比で上期に数量増、下期においても若干増と見ており、下期に向けて数量が下がるのは例年通りである。MicroThin™の PKG 向けについて、前回予想では下期に向けて一服すると見ていたが、お客様の話では好調が続くのではないかという見方もあった。今回予想では 1 月以降にかけても好調が継続するという前提で見ている。ただし旧正月の影響から上期から下期にかけては少し下がるという見方をしている。
- Q. P.14 から、2024 年度から 2025 年度にかけて銅箔事業が 148 億円増益しているがどういった要因によるか。
- A. 148 億円の増益について、MicroThin™と電解銅箔の数量増による増販益が合算で 100 億円近く出ている。販売価格では、2024 年度下期に MicroThin™を中心に実施した値上げの効果が今年度に大きく貢献し、足元の VSP™を含む電解銅箔での値上げの効果と合わせて 30 億円から 40 億円ぐらいの増益を見込み、それとは別に電解銅箔で VSP™比率が上がることによる平均単価の好転から 30 億円を超える増益を見込んでいる。一方で、固定費や販管費増加による悪化を 20 億円超で見込んでいる。
- Q. VSP™の値上げは 2024 年度下期に打ち出した値上げとは違う新たな話という理解でよいか。その効果はいつから、どれぐらいの規模か教えていただきたい。
- A. 2024 年度下期から適用した値上げとは別の取り組みであり、VSP™も含めた電解銅箔でお客様に申入れをし、ご理解を求めている状況である。今年度下期に一桁億円後半ぐらいの効果が出ることを期待している。
- Q. 電解銅箔の平均単価の好転が 30 億円を超えるということは、前回予想では電解銅箔のミックス改善は 30 億円下回る程度で VSP™の通期販売数量は前回予想と変わっていないのでハイグレード比率が高まっているということか。
- A. 電解銅箔の平均単価が前回予想から今回予想でわずかに良くなっている要因は、VSP™だけではなく通常の電解銅箔も含めた全体の平均で比較しており、販売構成の変化によるメリットが出ているとご理解いただきたい。
- Q. 銅箔事業の OP マージン(営業利益率)が改善してきていると推測されるが、今期から来期に向けてのマージン改善への取り組み方、値上げのポイントなどを解説いただきたい。
- A. MicroThin™は来期に向けて右肩上がりに数量が増えるが、一方で生産能力については既にプレスリリースした通り、あまりコストをかけずにキャパシティを準備することで、固定費が薄まる効果でマージン率が改善していくと見ている。電解銅箔は、VSP™の数量が増え、VSP™のなかでも特に銅箔カテゴリーの高い、より付加価値の高い製品の比率を増やすことでマージン率を上げることを狙っている。インフレによるコスト増はもちろんあるが、直近では電解銅箔のお客様へ値上げの申し入れに取り組んでおり、MicroThin™については足元では申し入れはしていないものの、引き続き当社の収益性やコスト状況を見て検討していくことになる。
- Q. 11 月 11 日リリースの VSP™の生産体制増強について、能力増強の決断に至った決め手と背景を解説いただきたい。例えば 2026 年、2027 年のユーザーの採用の変化についてある程度の確信が見えたのか、需要の獲得度や確信度がどう変化したのか教えていただきたい。
- A. 現在お客様から色々な情報を得ているなかで、非常に強い数量が求められており、お客様によっては長期見通しとして 2026 年から 2027 年にかけての数量が実際に提示されている。そういった背景もあり、数量が強く伸びていくことに対して確度が高まった。今回は生産数量を 1,200t と決めたがこれを上回る可能性も当然考えており、そのときは増強を前倒していくなど、需要に追いつくようにこれからも増産等を検討していくことになる。

Q. 今年度に VSP™の値上げを行った背景はどういったところにあるか。物価上昇等で今期にコスト増を見込んでいるが、それを上回る値上げを打ち出しているように見えるので、どうい変化があるのか、今後はどういった姿勢を維持していくのか教えていただきたい。

A. コスト環境が悪化するなかで利益率の確保を意識しているが、同時に当社が提供する付加価値を考えている。特に銅箔事業において、技術的に高付加価値なものを提供できていることから、お客様にご負担をお願いするという取り組みを検討している。

Q. MicroThin™の PKG 向けについて、スマホ向けと非スマホ向け、DDR5 などサーバー向けで分けるとどう見ているか教えていただきたい。

A. スマホ向けも非スマホ向けも非常に需要が強好調である。スマホ向けはメモリやカメラモジュール等の需要、非スマホ向けでもサーバーのメモリ等に向けて非常に好調で、販売量も上振れており下期も継続することが見込まれている。

Q. MicroThin™がフレキシブル基板用途に展開するという 11 月 11 日のリリースで、FPC 向けの採用について書かれているが、これはどれくらいのポテンシャルがあるのか解説いただきたい。

A. FPC 向けの MicroThin™について、1 月の事業説明会で MicroThin™の新規用途として光モジュール、インフラ高多層基板向け、次世代フレキ向けを申し上げたなかの、次世代フレキ向けにあたる。25 中計にもある程度の効果を織り込んでいるが、当社が見込んだ時間軸よりも早い段階で実際に採用が始まり、今後の拡大への期待が高まってきている状況である。

Q. MicroThin™の光モジュール向けの販売数量について、第 1 四半期から第 2 四半期にかけて何か変化があれば教えていただきたい。

A. 光モジュール向けについては、新規用途での拡販として好調に推移している。

Q. 汎用 DRAM の需給がひっ迫して足りておらず、韓国のメモリメーカーが今後の増産に非常に意欲的であるという話がある。来期以降に向けて MicroThin™の PKG 向けに数量増効果として出てくることを期待してもよいか。

A. メモリ関係では、汎用 DRAM の数量増は、当社の販売機会に寄与すると認識している。HBM では MicroThin™は使われないが、汎用 DRAM が増えることは非常にポジティブである。

#### 【金属セグメント】

Q. 金属事業について、鉛の繰返し原料とはどういったものか教えていただきたい。また、これを除いても 2025 年度の実力損益 246 億円は高い水準であるが、これを来年度以降の発射台として考えるべきなのか、あるいは定修の影響をもう少し割り引かないといけないのか、金属事業の考え方を教えていただきたい。

A. 鉛の繰返し原料は、鉛関係の工程で滞留していた原料で、管理強化の一環で供用を進めずすでに供用済みとなっている。残渣系の原料で、分析の結果、貴金属等が含まれていたためメリットが出た。一方で、すでに供用済みのため、今後同様の原料は出てこない見込みである。利益の水準が高いことについて、足元は金属価格や為替が当社に有利な事業環境であり、TC が厳しい部分もあるが、この前提であれば利益は出ると考えている。

#### 【全社】

Q. 2026 年度の業績予想を作るときのたたき台として、実力損益としてどの数字を積み上げていけばいいのかアドバイスいただきたい。

A. P.25 に記載の通り、2025 年度下期の営業利益を実力損益 333 億円と見込んでおり、これは一過性要因は含まれていない。これをベースに次年度への変化点として、金属セグメントでは亜鉛と銅の定修を予定しており、例年通りであれば約 40 億円の損益悪化となる。一方で好転要因として、金属セグメントではこれから亜鉛 TC の来年度に向けた交渉があり、今年度が厳しかったため上昇を期待するところと、機能材料セグメントでは特に銅箔の販売数量が右肩上がりに増えているところが増益に寄与すると考える。

以上